

〈内面〉の所在

——一葉「日記」の読書行為——

一、はじめに

明治四五年五月に博文館から刊行された『一葉全集 前編 日記
及文範』（以下『全集前編』）が引き起こした現象は、〈樋口一葉〉

受容の転換点として見逃すことができない。周知の通り、それまで存在のみが知られていた一葉の「日記」が、この『全集前編』に収録されることによって初めて流通した。生前・死後を通して様々なコンテクストの中で異なる像^{イマージュ}を結んでいた〈樋口一葉〉であるが^①、『全集前編』の刊行は、「没後の一葉」のさらなる「再定義の季節を迎える契機^②」となっていたのである。そして「内面外面の生活の忠実なる記録^③」である「日記」の流通は、その「再定義」を作家像のみにとどめなかった。一葉「日記」の編纂にあたった馬場孤蝶の、次のような文章に着目したい。

〈内面〉の所在

笹尾佳代

僕はあの『日記』を大部分一葉女史の本当の心持を書いたもの
だと思ふ。その心持が幼稚でも、甘くつても、人間の心の記録
としては、——殊に創作と対照して読む場合に於て——甚だ貴
いものだと思ふのだ。

「文壇三十年の回想」『新潮』一七—五、大正元・一一
ここでは、すでに流通していた一葉の「創作」を「日記」との
「対照」の上で読み直すという、新たな読書行為の可能性が示され
ている。「日記」の流通が、作品受容の過程にまで作用する様相を、
ここに認めることができるのだ^④。そこで本論では、「作家」の私的
言説である「日記」と、テクストとが交差させられていく様相を、
同時代の文壇の主流であった自然主義思潮との関係の中で捉えてい
きたい。その際、特に留意したい点は、次の水野葉舟の文章にあら
わされている。

自分はこの女史に対する婦人の文学者の感想が二つばかりあるのを知つて居る。(中略) 自分はこの二人の人の感想に対して、最も興味を起して居るのは、「女一女」と言ふ關係に對してである。女が女を如何に見るかといふ、一点に不思議な興味を感じるののである。

「一葉女史論 其の二」『女子文壇』八一―二、大正元・一二
ここでは、「婦人の文学者」が一葉「日記」へと寄せた「感想」の存在が示され、女が女を読むという構造が注目に値すべきものとして位置づけられている。こうした言説の背後には、例えば「女子と男子の間には涉るべからざるものがある」とされ、「男子の頭脳ではそのある所までは解りましても、そのある所からは全くわかりやうがない^⑤」と述べられることや、「男女両性の間に、何等かの越ゆ可からざる境遇あり^⑥」とされるなど、「女性にしかわからない」ものの存在を認めるといった、「自然」(主義)を話題にしていた文壇全体を覆う女性観^⑦を窺うことができる。この頃、「自然」といった指標の下、ジェンダー差に過剰な意味づけがなされていたのである。こうした状況の下、一葉「日記」は、そしてその背後にあるられる〈樋口一葉〉はどのように読まれたのであろうか。「日記」の流通が可能にした読書行為の内実を捉えることを通して、この時新たに与えられた〈樋口一葉〉評価とその特質を明らかにしてい

たい。

二、「一葉全集前篇 日記及文範」の位相

「新刊紹介 一葉全集前編」として『太陽』(二八―九、明治四五・六)に掲載された記事の末尾には「今にして世に出たるは文芸の為に賀す可く、定めし世間読書子の心を惹くことなる可し」と添えられている。ここからは、「日記」と『通俗書簡文』(博文館、明治二九・五・二二)からなる『全集前編』が一葉の創作をまとめたという意味以上に、受容される「今」の「文芸」の状況の中で価値が認められていたことを窺うことができる。そうした側面を明らかにするために、『全集前編』に対する文壇の反応を、当時の出版状況における「日記」の位置づけに着目することから捉えておきたい。^⑧
明治三〇年代から四〇年代にかけて、「日記」をめぐる言説がメディアの中に数多く現れる。佐々木基一はこうした現象を「日記の流行、日記文の様式化、自然主義の思潮」の三点において捉えており、特に「無技巧」へ告白」といった装置との連動、あるいは意識的な活用」のなかで、「日記」という文章形式が選択されていたことを指摘している。^⑨こうした動向は、この時期『日記文範』といった書物が多数刊行されていたこと、また、様々な「文範集」にも「日記文」という項目が設けられたことにも見ることができ

これらの文範では、「日記文」は日記に一字を加えただけで、文学の領域に入ったのである^⑪。や、「日記文」は「文学上の価値を有し読者に美感を与える^⑫」などと述べられ、「文範」として河東碧梧桐や、与謝野晶子、落合直文^⑬ら、作家の「日記」が掲載されていた。

こうした動きと連動するものとしてとりわけ注目したのは、当時の様々な投稿雑誌の懸賞作文の中に「日記」が加えられていたことである。「賞金を掲げることで不特定多数の読者の欲望を刺激し、メディアを通して書き手に変貌することを促し^⑭」ていたのであり、このとき「日記」は作家になるための道を開くものとして位置づけられるようになっていたのだ。こうした状況の下、「文範」と名を変えられて所収された『通俗書簡文』と、「日記」による『全集前編』は、読者に書くことを促す機能をも備えたものとなっていたといえるだろう^⑮。

さらに、『全集前編』が刊行される以前に、「日記」編纂中の馬場孤蝶が発表していた次の文章に着目したい。

一葉は文章の稽古をする積りで日記を付けたと云ふ話であるの
だか、元より人に見せるものと思つて書いたのでは無いらしい、
現に死ぬる時には日記を焼き棄てろ、と遺言した。(中略)先
づさう云ふ譯のものであるから著者自身が出遇つた人及び事件
に關して著者は自分の考へた通りを書いたものと見ざるを得無

い。さう云ふ風に考へると、一葉の日記はある婦人の偽らざる思想、偽らざる生活を書いたものと見るが至当であつて、もし此日記に対するさう云ふ見方が間違つて居ないとすれば、日記は一葉の作物よりもつと尊いものだとする事が出来るかも知れ無い。

「日記を通して見たる樋口一葉」

『早稲田文学』第二次一七三、明治四四・一二
ここでは「元より人に見せるものと思つて書いたのでは無いらしい」という断り書きがなされ、さらには、「焼き捨ててくれ」という「遺言」があつたことが示されることによつて、「ある婦人の偽らざる思想、偽らざる生活を書いた」ものとして「日記」が高く評価されている。全集刊行後すぐに『新潮』(一七一、明治四五・七)に掲載された「新刊紹介 一葉全集(前編)」においても、「発表するつもりで書いたのではなく、死ぬる時に焼き捨て、呉れと云つた」と解説されることによつて、「内面外面の忠実なる記録」であることが強調されていた。描かれた内容の真实性を保証するこうした言説の背後には、「内面の物象化ともいふべき日記観と自然主義思潮の接続」が認められよう。

孤蝶の文章を、さらに追つてみたい。

一葉に恋愛があつたか、と云ふ問題は直ぐ起つて来る事と思ふ

が、それは確かにあつた。その対象になつた人は、一葉の小説の師であつた半井桃水君であつた。(中略)普通の意味から云ふと、一葉が処女で死むだらしく思はれる事が極く宜い事であらうけれども、一葉の芸術的能力を發展させる方から見れば、結婚に終らない激しい恋愛が一葉に有つたら反つて面白かつたかと思はれる。

然し斯う云つた所で私は一葉が半井君の愛人であつたと云ふ噂を打消したい、と云ふのでは決して無い。唯一葉の創作物を見る上には男に肉体上の関係のあつた人であつたか、否かと云ふ事を一応は考へて置く必要がある様に思ふから、唯一言して置くのみだ。

ここでは「一葉に恋愛があつたか、と云ふ問題は直ぐ起こつて来る事と思う」と一葉の「恋愛」へと焦点があたり、それは「確かにあつた」と、長く謎とされていた真実が「日記」によって明らかとなつたことが示されている。そして、「男に肉体上の関係のあつた人か否か」と語られるなど、スキヤンダラスな視線が向けられているのである。

ここで、自然主義思想の代表的作品とされる田山花袋の『蒲団』(『新小説』二二一九、明治四〇・九)へと寄せられた同時代評をみておきたい。

蒲団は田山君の傑作であるばかりでは無く去年来所謂自然派小説の勃興してから此方、始めて其代表的作物に接したやうに思ふ。(中略)『蒲団』を読んで、作家として最関心するのは、材料が事実であると否とは兎に角、作者の心的閱歷または情生活^マをいつはらず飾らず告白し発表し得られたと云ふ態度である。

小栗風葉『蒲団』合評

『早稲田文学』第二次一三三、明治四〇・一〇
ここにあらわされているように、作家と作中人物が重ね合わせられ、その「心的閱歷または情生活」の「告白」に『蒲団』の最大の価値が置かれていたことは周知の通りである。こうした言説を、「恋愛」や、「肉体上の関係」といった点に関心が寄せられていた一葉「日記」への評価と対照させた時、そこにもまた、作家の「情生活」、すなわち「性的なものへの告白」を読もうとする『蒲団』と同質の視線が向けられていたことを窺うことができるのである。
このように、作家の秘められた「内面」、「思想」、「生活」の告白であるといった要素が強調されて、流通させられた一葉「日記」は、「一葉の作物よりもっと尊いものだとすることが出来るかも知れない」とまで高く評価された。すなわち、自然主義思潮が主流であった文壇の下、〈告白〉および〈現実的暴露〉の強度によつて、一葉の「日記」に文学的価値が与えられたのである。

三、接続／乖離する一葉「日記」と「作品」

ここまで考察してきたように、自然主義思潮との運動によって、一葉「日記」には高い評価が与えられていた。こうした「日記」であったからこそ、既に流通していた一葉の「作品」へと、遡及的に作用していくのである。次に、『全集前編』刊行前後の評価に着目することから、「日記」の流通が「作品」の受容過程へと作用する様相を捉えていきたい。

一葉一三回忌にあたる明治四一年頃から、一葉に関する記事がメディアの中に数多く見られるようになっていたのだが、その一つとして、明治四〇年六月の『中央公論』（二二一六）に「明治故人評論」と題して掲載された「一葉女史特集」がある。ここでは、『たけくらべ』を中心とした作品評価がなされているのだが、そこには立場の違いを認めることができる。

正岡子規門下の俳人である佐藤紅緑は、「一葉女史の作品」といふ文章の中で「確かにたけくらべの文は露伴紅葉以上だと今でも信じます、さうです、文章の上です小説としては別問題でせう」と述べていた。ここでの「文章」評価の指標としては、子規が「天下の名文だ」と述べたことが同文章中に挙げられていたことから、「写生」といった面が評価されていることを窺うことができる。しかし、

〈内面〉の所在

「小説」としての評価は「モウバツサンやダヌンチオが流行だしている時代」であることを理由に、「今日の小説としては如何なものか」と批判的に述べられていた。現実をありのままに描いた、彼の作品に対して、一葉作品にはその要素の不足を認めているのである。島村抱月「一葉女史の作物」もまた、「芸術」の推移を「金属が外皮から錆びて剥げ行く」「酸化」にたとえ、「明治の社会では、殊にこの酸化作用が急なものでせう」と、一葉の作品が、もはや過去に評価された作品にすぎないものとして位置づけていた。

しかし一方で、島崎藤村「一葉女史について」では、「女史の作品が女史の生涯と密接に相触れて居たことは最も吾斎の注意を引く点である」と作品と作家の生涯の隣接を認め、「たけくらべ」となると最もよく相触れて居るらしい。昔から好い文学は作意と生涯との接近した時に産れるやうである」と述べられていた。すなわち、批判的評価と同質の自然主義思潮に則って、高く評価されているのである。

こうした評価のゆらぎは、一葉全集刊行が近づくにつれ、一方へと収束されていく。田山花袋が「明治の作品研究―一葉の『たけくらべ』」（『文章世界』六一五、明治四四・四）において「たけくらべ」は再現の気分に富んだすぐれた作品である」とし「其当時多く世に顕はれた作品のやうに、中心点を求めたり、燃焼を施したり、

観念をあらはに露はしたりして居ない。解決を欲さずに、ライフの赴くまゝに赴かして居る」と、高い評価を与えたことに代表されるように、自然主義的な評価の指標の下、こうした評価が一般化されていくことになっていたのである。「日記」流通以後、『たけくらべ』が話題になる際に必ずといってよいほど、「たけくらべは千束町で小さな文房具屋を開いてゐた折りの作である」といった解説が付されるなど、「日記」が作家と作品の隣接性を保証するものとして働いていくことをここに認めることができるのだ。

しかし、一葉「日記」に向けられた評価と「作品」評価の、パラドキシカルな関係を看過することはできない。一葉「日記」が高く評価された要因は、作家の秘められた「内面」の〈告白〉にあった。しかし、すでに流通し、一定の評価を受けていた「作品」は、「再現の気分に富んだ」といったように、作家の客観的な創作態度によって評価されているのである。再び一葉「日記」をめぐる言説へと戻り、その内実を明らかにすることから、高く評価されていた〈告白〉の性質を捉えていきたい。

近松秋江は「一葉女史の『一葉全集』」(『文章世界』七十八、明治四五・六)の中で、「日記その物の文学的価値あることは申すまでもなく」とした上で次のように述べている。

一葉女史は徳川時代の武士の娘であつた。仮令小録を食んであ

たにもよせ、彼の女が如何に、徳川時代の嚴肅なる武家の道徳に依つて教育せられたるか、さういふ物堅い心掛けは日記の凡ての頁に発見することができる。(中略)

道徳は時勢と相移る。一般の道徳ばかりではない。単に婦女の道徳に就いて考へても、所謂新時代の女性とか申すものが出来て、一口に言へばお転婆が多くなつた。女史の日記を読むと、和歌の師中島女史の家の会合には出るが、その他の男子の会合の席などには何と言つて招待せられても、すぐ自分は女であるといふことを省りみて、決してさういふ席には出ない。(中略)今更ならねど、日記を読むに及んで、ますく「一葉女史の懐かしい尊敬すべき奥床しい女情を具さに知ることが出来る。」

秋江は「徳川時代の嚴肅なる道徳」、つまり『女大学』的な道徳を「日記」に描かれた一葉の姿に見いだしている。そして、「女であるといふことを省みて」身を処す姿に着目し、「懐かしい尊敬すべき奥床しい女情を知ることが出来る」点を評価しているのである。さらに、「日記」を高く評価していた孤蝶が同文章中で述べていた、次の言説に着目したい。

(一葉の日記には―引用者注)飽くまで女性らしい所が諸処に認められる所謂盾の両面を見る事が出来ないのが先づ並の女の本性なのだが、さう云ふ如何にも女らしい処が日記には沢山あ

る。(中略)一葉の日記にはつまり主張一点張りで物を見たり
解釈したりして行かうとする女の狭い所が如何にもよく出て居
る。

「日記を通して見たる樋口一葉」

『早稲田文学』第二次一七三、明治四四・一二

「女性らしい所」「女らしい処」「女の狭い所」と繰り返されてい
ることに明らかなように、一葉「日記」にあらわれた〈内面〉は、
その「女らしさ」の表出という点において評価されているのである。
こうした評価の背後には、女性表現に向けられた次のような指標
を認めることができる。

要するに女流作家に向つては、男の作家に向つて要求する作物
と、同じ意味の作物を要求する事は全然出来ない。充り女流作
家にも、文学の一般に向つて要求するのは余り酷である。只、
文学の一部を要求する外はない。其一部と云ふのは穩健なる作
物、一女らしいところを要求するより外はない。(中略)女性
作家に望む所は、飽く迄も其の女らしい所を保存し其の女らし
い所に適合するやうな作品を中心に書いて貰いたい。

小栗風葉 柳川春葉 徳田秋江 生田長江 真山青果
「女流作家論―其大成せざる所以」

『新潮』八一五、明治四一・五

〈内面〉の所在

ここに示されているように、あくまでも「男性の作家」があらわ
すことのできない「女らしさ」の表出という点のみにおいて、女性
の「文学」が評価されようとしていたのである。すなわち、「女ら
しさ」の表出に評価が集まっていた一葉「日記」もまた、男性とは
差異化された「文学の一部」として評価されていたと考えられるの
だ。したがって、既に流通し、高く評価されていた「作品」には、
女性ジェンダー化された〈内面〉が呼び込まれることはなかったの
である。

四、〈内面〉の発見

これまで検討してきた一葉「日記」への評価と、その「作品」受
容への作用からは、男性ジェンダー化された読みのあり方が明らか
になった。ここに再び本論冒頭部で示した、「女が女を如何に見る
か」という水野葉舟の言説を呼び起こしたい。先の近松秋江による
文章の中にも「所謂新時代の女性」とあったように、彼らによつて
一葉を読む「女」として定位されていたのは、『青鞥』へと集つた
「新しい女」たちであった。次に、彼らの評価との同一性と差異に
留意しながら、「女が女を読む」行為が可能にしていた、一葉評価
の新たな一面を明らかにしていきたい。

平塚らいてうは『一葉全集』の刊行を受けて、「田窓より一女と

しての樋口「一葉」を『青鞥』(二二一〇、大正元・一〇)に発表する。ここでらいてうは「一葉全集上下二巻、ことに其日記には自分は少なからず様々な意味に於いて失望した」と述べ、「一葉には一葉自身の思想がない。問題がない。創造がない」と強く批判していた。同時期、田村俊子も「私の考へた『一葉女史』を『新潮』(一七―一五、大正元・一一)に発表するのであるが、俊子もまた、「糊口と云ふ事を因にした小さな自己本位であつたが為に、さして、真の人世に対する、又、深き芸術に対するこの人の思想を極度に發展させてくるだけの問題には出逢はずに済んでしまつた」と「日記」から読み取つた「一葉の〈内面〉には批判的であつた。しかし、「思想」の深さに欠けている、「自己本位」であるといつた彼女たちの評価が、男性たちと同じ指標からの批判であることに留意する時、こうした言説は、一葉によつて代表され、画一化されようとしていた「女性」評価からの差異化を図るものとして捉へることができ²¹⁾。

彼女たちの発言は「偶像破壊」として批判されるなど、一葉批判の側面が前景化されてきた²²⁾。しかし、らいてうが同じ文章中で「今日迄大多数の女はそれが作家なると、読者なるとを問わず殆ど総てが一葉崇拜者であつた。少なくとも嘗て一度は非常に好んだといふものであつた」とし、「弱者として何事にもちつと堪え忍ばねばならなかつた日本の女にかはつて、其悲しい胸の奥の秘密、其の苦痛

を出来る丈同情を以て巧みにしかも力強く発表してくれたからではあるまいか」と述べていたことに明らかのように、一葉との同化も強く示されているのである。こうしたらいてうの発言が、相馬御風の発言に類似していることはすでに指摘されているが、それを女性自身、声によつて語るることによつて、その真实性を保証し、女性同士の間で測られていられると考へられるのだ。そして、田村俊子も次のように述べていた。

久し振りで女子の作品を読み、日記を通読してこゝに新たに私の考へた樋口夏子は、ある程度まで女史の心持ちを理解し、同情した涙を連絡にして、さうして私自身を結びつけてしまつた単に私だけの樋口夏子であるかも知れませんが、ちよいとこれをお断りしておきます。

俊子もまた、「心持ちを理解し、同情した涙を連絡にし」、「自身を結びつけて」、「日記」から「一葉」の姿を「考へる」と、一葉への「同情」、連帯を示している。『青鞥』発起人の一人であつた木内鏡子もまた、一葉を「自分の姉さん」のように感じていたと述べ、「日記」について、「総てもしも私が一葉で有つたならば、必^マ度^マあの通りに行つたらうと思はれるやうな事ばかり至る真に見出される事でした」と、同じく「私」との接続を示した上で一葉を評価していた²³⁾。すなわちここには、女性同士の連帯、共感をもとにした読

みの指標が働いているのである。

再びらいてうの記事を見ておきたい。

思想感情は、貧困に際して彼女に小説を書かせた丈で、既作品によつて発表の道を得させた丈で、実生活の上には全く現れず
に仕舞つた。(中略)

彼女にはわるくすると「お力」「お京」の道に赴かうとする
傾向の方が寧ろ勝つてゐる。一葉の社会観、人生観は「やみ
夜」「わかれ道」などで殊に明らかに窺はれる。

「不運は天にありて、身から出た罪にもあらぬを親なし子と
蔑しめる奴原が心は鬼か(中略)(やみ夜)」

社会と個人との関係、強者と弱者との関係に対する一葉が胸
にあまる悲憤の叫びではなからうか、同時に個人と弱者に対す
る熱烈の同情、社会と強者に対する絶望的の反抗の声ではな
からうか。

最初の傍線部にあるように、らいてうは一葉の「思想感情」が
「発表」されているものとして「作品」を位置づける。「日記」にあ
らわれた一葉には「個性的方面が欠けている」と批判していた彼女
は、それを經由することで、「作品」へとむかつていく。そして、
「お力」「お京」といった作中人物と一葉の思ひの連続性を認め、さ
らに、作品の一部を引用することで、「一葉の社会観、人生観」を

〈内面〉の所在

示していくのである。すなわちらいてうは、一葉への共感を示した
上で、作品に作家の心情を見出し出していたのだ。そして、「一葉の
胸にあまる悲憤の叫び」や「絶望的の反抗の声」として、その作品
を位置づけているのである。

田村俊子もまた、先の文章中において、一葉と作品の関係を次の
ように述べていた。

「にこりえ」「たけくらべ」の傑作は、この当時の著であつた。
この時でも、荒波のやうな女史の感情の惑乱の陰になつかし
い色を静かに投げてゐたものがあつた。それは忘れ得ぬ過去の
恋のおもかげであつた。(中略) 僅かな年月の間に激しい打擲
と残骸とを受けた往時の初心と可憐に対する追憶のなつかしみ
は、この恋人の往時のおもかげと共に女史の心に消えがたいま
ことの涙を覚えさせた。当時の女史の心の影のそれに潜めるも
のは、「にこりえ」のお力でもなく、わかれ道のお京でもなく、
むしろ、「たけくらべ」の美登利であつた。女史は美登利の上
にあらゆる親しみと愛しさと、しをらしさを托して、消えがた
い追憶のなつかしみとなつかしみの涙の蔭に、この美しい少女を
描いたのであつた。

俊子はここで、「にこりえ」「たけくらべ」の背後に、一葉の「過
去の恋のおもかげ」の存在を示している。その上で、「たけくらべ」

の「美登利」に一葉の〈内面〉の表出を認めているのである。以上のように、彼女たちは「作品」に、一葉の〈内面〉を発見していく。

「並の女」「徳川時代の武士の娘」といった言葉に象徴されるように、一葉「日記」から「典型的」な「女らしさ」を読み取り、「作品」を客観性において評価する男性たちの読書行為の過程では、〈樋口一葉〉の個別的な〈内面〉は空白のままに残されていた²⁵。しかし、「新しい女」たちは、「日記」と「作品」を接続する読書行為を通して、〈樋口一葉〉に個別的な〈内面〉を与えたのである。すでに一定の評価を得ていた一葉作品に〈内面〉の表出を認める彼女たちの読書行為は、女性の〈内面〉の〈告白〉が「文学の一部」としてしか認められていなかった文壇状況への、批判ともなり得ていたといえるだろう。〈樋口一葉〉へと託された可能性の諸相を、ここに認めることができるのである。

一葉評価をめぐってのこうした現象のその後を、一葉「日記」流通三年後に発表された次の文章に見ておきたい。

「たけくらべ」に至れば更に余裕のある客観的態度をとつて、完全に近い芸術化を成し遂げてゐる。この作には小さい主観は影も見せて居ない。(中略)比較的全客観的態度、自然主義的態度によつて描かれてゐる事は、此作が一葉の作中に於ても殊に傑れてゐる所以である。(中略)彼女の作品の中「に」

りえ」「われから」「わかれ道」「十三夜」等が「たけくらべ」に次ぐの傑作と称せられる。(中略)お力、お京などの女主人公は、一葉其人の分身であつた。けれども、決して夫れが類型に墮して居なかつた処に、彼女の及び難い創作力が認められる。ここでも、やはり「客観的態度」に「芸術」性が認められ、「傑れてゐる所以」であると述べられている。しかし一方で、やや否定的ではあるものの、「にこりえ」や「わかれ道」に一葉の「人生観」が表れていることが認められ、「お力、お京」が「一葉其人の分身」であるなどと、作中に一葉の姿が見出されている。そして、そこに「及び難い創作力」が認められているのである。

さらに時代が下がった大正末になると、「婦人運動といふことの未だ夢想だもせられなかつた時代に、無告の日本人婦人のために代弁者として、虐げられたものの懊悩を二十余編の小説に描き出したことは、独り文学を人生に触れしめた先覚の事跡であるのみならず、我が婦人会に於ける開拓者の貴重な努力である」などと、「女性」の〈内面〉を語った、婦人運動の先駆的なものといった作品評価を認めることができる。大正末というコンテクストの中での検討は必要なものの、こうした評価は、一葉の〈内面〉の〈声〉を発見した、「彼女たちの」評価を受け継ぐものとして位置づけることができるだろう。らいてうら「新しい女」が女性としての〈声〉をあげたそ

の時、言説の交差の中で「内面」が発見されたことによって、一葉もともにその「声」をあげることができたのである。

注

- ① 異なるコンテクストの中で「樋口一葉」像が変容していく様相は、小平麻衣子「一葉」という抑圧装置―明治四十年代の女性の書き手をめぐる諸相―（『埼玉大学国語教育論叢』五、平成一四・一八）、小川昌子「姿貌する「一葉」―明治三十〜四十年代における「一葉」語りの諸相―」（『日本近代文学』六七、平成一四・一〇）などに詳しい。
- ② 関礼子「円窓」からの発信」（「一葉以後の女性表象」文体・メディア・ジェンダー）所収、翰林書房、平成一五・一一・二六
- ③ 「新刊紹介」一葉全集（前編）（『新潮』一七一―一、明治四五・七）
- ④ 他にも、たとえば水野葉舟「一葉女史論 其二」（『女子文壇』八一―二、大正元・一二）において「女史の作品と日記との間にある関係」に着目され「あの日記を書くどの部分がああ傑作「わかれ道」を書いたらう」などと述べられているように「日記」と「作品」を接続しようとする読書行為の存在を窺うことができる。
- ⑤ 田山花袋「閨秀文章家」（『文章世界』一一二、明治三九・四）
- ⑥ 小栗風葉 柳川春葉 徳田秋江 生田長江 真山青果「女流作家論―己を忘れたる女流作家」（『新潮』八一五、明治四一・五。なお、座談会形式のこの特集記事には、発話者の名前が明記されていない）。
- ⑦ 小平麻衣子（前掲）
- ⑧ 小川昌子（前掲）は、「日記」という「個人的な情報の開示が正当化」されていく「ジャーナリズム」上の手続きについて考察している。
- ⑨ 佐々木基「物象化される「内面」―日露戦争前後の「日記」論―

「内面」の所在

（『日本近代文学』六七、平成一四・一〇）

- ⑩ 例えば、大和田建樹編『通俗作文全書第一編 日記文範』（博文館、明治四〇・八・一六）、吉野甫『日記文作法』（昭文堂、明治四一・二・四）、中村枯林『女学生日記文範』（金港堂、明治四一・七・二二）、小林愛雄編『日記新文範』（新潮社、明治四三・二・二二〇）、内海弘藏編『日記文範』（成美堂、明治四五・一・二五）など。
- ⑪ 吉野甫（前掲⑩）。ここでは「一葉「日記」が「日記文」の文範となり得ることが示されている。
- ⑫ 生田星郊編『通俗作文全書第四編 明治時代文範』（博文館、明治四〇・一二・七）
- ⑬ 生田星郊（前掲⑫）
- ⑭ 大日本国民中学編『女子作文全書』（東京国民書院、明治四三・二・二五）
- ⑮ 紅野謙介「懸賞小説の時代」（『投機としての文学』新曜社、平成一五・三・二〇）
- ⑯ 『新文章問答』（新潮社、大正二・六・一一）には、「日記と手紙との作文上に於ける利益を問ふ」といった項目が立てられ、その「答」として「日記も手紙も、文章練習の機関として最も重んずべきものである」と述べられるなど、「日記」のみでなく「手紙」も、文章の練習として有益なものとされていたことが窺える。
- ⑰ 佐々木基（前掲⑨）
- ⑱ 一葉の恋愛をめぐる言説は小川昌子（前掲⑧）に詳しい。
- ⑲ 同様の内容が、当時の一般読者向けの文章指南書であった『新文章問答』（新潮社、大正二・六・一一）をはじめ、『代表的名作選集第七編 高山樗牛・樋口一葉』の「解題」（同、大正三・一・一四）、『新文学百科精講』（同、大正三・四・二〇）に見られ、とりわけ新潮社が主流と

なつて、一般化がなされようとしていたことが窺える。

- ⑳ 相馬御風「明治文章講話」(『新文学百科精講』所収、新潮社、大正三・四・二〇)

- ㉑ 中山清美「明治四十年代 一葉受容と「新らしい女」―「円窓より女としての樋口一葉」を中心に―」(『名古屋近代文学研究』一五、平成九・一二)は「日記」発表とともに「懐かしい尊敬すべき奥床しい女情」を持った「一葉女史崇拜」が男性たちの手によって強化されようとしている点を指摘し、らいてうはジェンダー規範といった「磁場」に「自覚」的であればこそ、「新しい女」宣言を前に、「旧さ」を拭い去るために、一葉を否定した」と述べている。

- ㉒ 島崎藤村「一葉女史論 其二」(『女子文壇』八一―一二、大正元・一二)

- ㉓ 例えば、小平麻衣子(前掲①)、中山清美(前掲②)などの近年の先行論においても、この時期の「樋口一葉」言説が持っていた否定的側面が指摘されている。関札子(前掲②)は「一葉」という記号が「後進の表現者たちや研究者たちにとって「抑圧装置」として」機能していることを認めながら、同時に「牽引力に満ちた「欲望装置」として機能している面を見逃すわけにはいかない」と述べている。

- ㉔ 中山清美(前掲②)

- ㉕ 木内鏡子「一葉女史論 其の五」(『女子文壇』八一―一二、大正元・一二)

- ㉖ 男性文学者による一葉評価の中に、管見の限り唯一「わかれ道」の主人公に「作者の心の或る姿」が宿っていると認める水野葉舟(「一葉女史論 其二」『女子文壇』八一―一二、大正元・一二)の発言がある。しかし、この文章の冒頭部で、「婦人の文学者の感想」(「平塚らいてう「円窓より女としての樋口一葉」を読んだことが明記されており、そ

れを受けての発言であると位置づけることができる。そして、葉舟もまた、「人に触れると共に興奮して、その意識し得ない才力が、火光を発する」などと、一葉自身の「自覚」もないままに傑作が生まれたと、作家の〈内面〉と作品を乖離したものとして評価している。

- ㉗ 相馬御風(前掲②)

- ㉘ 岩城準太郎「開拓者の悲劇」(『明治大正の国文学』大正一四・六・五)

〔付記〕

本文の引用はすべて初出に拠った。引用に際し、旧漢字については適宜新漢字に改めた。引用文中の傍線および傍点はすべて引用者によるものである。なお、本稿は二〇〇五年六月一日に行われた樋口一葉研究会第一八回例会(於・お茶の水女子大学)で口頭発表したものに、加筆・修正を施したものである。席上および発表後にご教示下さった方々に心から感謝を申し上げたい。